

洛外閑話

第29回 淳豊堂 吉田昭二

深川六万壺

古銭に名前を付ける。

これは我が邦先人が発明、発案したものであり、古銭を愛玩し、分類の要諦にも役立たせたのですから叡智でもありました。

その名前には、例えば錢鉢の輪ならば「細縁」「潤縁」、穿・郭は「廣穿」「狭穿」「肥郭」「細郭」「長孔」、錢文には「大字」「小字」「陰起文」「肥字」「縮字」「遒勁」「麗書」、錢文自体の



写真① 六万壺新銭二百文青緞
虎之尾寛小字2孔

姿を言い表して「魚尾寶」「幻足寛」「蛇の目」「淋手」「笹手」「柳葉」「千鳥」等々、あらゆる特徴を採ったものがあります。

また、事の当否は別として、錢文揮毫者の可能性として「佐々木志津摩」「木下長嘯子」「長崎屋不田」「僧中正」なども用いられています。このように数え挙げれば切りがないほどに、日本、中国、朝鮮、安南など多くの古銭に、固有名詞としての名前がつけられてきました。特に

寛永通寶、宋の符合錢、明朝錢、清朝錢などの選別・整理には、大いに威力を発揮していることは今更申し上げるまでもありません。

ですから蒐集家の間では、一つの固有名詞、例えば寛永通寶の「島屋文」、北宋淳化元寶の「縮水」と云えば、北は北海道から南は九州・沖縄まで、およそそれを集め、楽しんでおられる方ならば、瞬時に錢面なり、特徴が思い浮かび、会話なり、文章の行き来、今の時代ならパソコンやスマホの画面で双方方向のコミニケーションが遲滞なく可能となるのです。

これは先人が絶え間なく研鑽を積み、それを培い、淘汰が繰り返さ

れたから、今の我々はその果実を享受しているのです。

なるほどと頷く名前が付されたものに出逢えば、良い名を考えられたのだと頷くばかりです。そんな中に、寛永通寶で「虎之尾寛」と呼ばれているものがあり、寛字の末劃が長く尾を曳いて廻りますから、名は体を表す、虎の尻尾とは格好の命名となつています。

これには「虎之尾寛」と「虎之尾寛小字」の二手があり、現在、我々が指針として活用させていただいている先師の錢書には、紀州・中島の鑄錢とする「虎之尾寛」と、その「虎之尾寛」と「虎之尾寛小字」ともに江戸・深川十万坪鑄造だとする、二説をみる事ができます。

さて、ここに寛永通寶二百文の青緞があります(表紙及び写真①)。

左右に百文づつ、都合二百枚の緞なのですが、その錢文を看ますと、先人が「虎之尾寛小字」と命名したものが全てであり、そしてこの緞には、杉の木札が結わい付けられています(写真②)。

その木札には、次の文言が墨書きされています。